

問1（①の歌・枕詞）

「山」を導く枕詞である。（「あしびきの」は「山」「峰」などにかかる。）

問2（①の歌・技法名）

序詞（じょことば）。「山鳥の尾のしだり尾の」は、長く垂れた尾の縁から後の語句を導く独創的な前置きである。

問3（①の歌・導かれる語句）

「ながながし夜」。

（歌意＝山鳥の長く垂れた尾のように長い夜を、私はひとりで寂しく寝るのだろうか。）

問4（②の歌・枕詞）

「神（神代）」を導く枕詞である。

問5（②の歌・技法名）

縁語（えんご）。「竜田川」という川の縁で、「水」「くぐる（水中をくぐる・潜る）」など水に関する語を散りばめ、一首をまとめている。

問6（②の歌・現代語訳）

不思議なことの多かった神代でさえも聞いたことがない。竜田川が、唐紅（からくれない）の色に水を絞り染めにすると。（紅葉が川面に散り敷く美しさを、染め物に見立てた歌。）

問7（③の歌・掛詞「ながめ」）

「眺め（物思いにふけて見ること）」と「長雨（ながあめ）」の二つの意味が掛けられている。

問8（③の歌・掛詞「ふる」）

「経る（時が過ぎる）」と「降る（雨が降る）」の二つの意味が掛けられている。

問9（③の歌・心情）

長雨を眺めて物思いにふけているうちに、桜の花の色があせるように、自分の容色も衰えてしまったという、過ぎゆく時への嘆き。

問10（④の歌・枕詞）

「奈良」を導く枕詞である。

問11（⑤の歌・掛詞「いなば」）

「因幡（地名・因幡国）」と「往なば（去ったならば）」の二つの意味が掛けられている。

問12（⑤の歌・掛詞「まつ」）

「松（因幡山の峰に生える松）」と「待つ（待っている）」の二つの意味が掛けられている。

（歌意＝あなたと別れて因幡へ去って行くが、その因幡山の峰に生える松のように、あなたが私を待つと聞いたなら、すぐに帰って来よう。）

問13（⑥の歌・修辞技法）

「雪は降りつつ」と現在進行を示して余韻を残す『つつ』止めによる表現。下句で情景を描いて余情を残

す手法。「倒置的に下句で情景を描く点」なども認める。）

問14 (⑥の歌・人物の様子)

相手のために早春の野で若菜を摘んでおり、その袖には雪が降りかかり続けている。寒さをいとわず真心を尽くす姿が読み取れる。

問15 (⑦の歌・序詞が導く語)

「くだけて」。「風をいたみ岩うつ波の」は、岩に当たって砕ける波の縁から「くだけて」を導く序詞である。

問16 (⑦の歌・「くだけて」の二義)

波については「(波が岩に当たって) 砕ける」、心については「(思い悩んで) 心が砕ける=思い乱れる」の意。

問17 (⑧の歌・枕詞)

「光」を導く枕詞である。「ひさかたの」は天・空・日・月・光などにかかるが、ここでは「光」を導く。

問18 (⑧の歌・主題)

日の光ものどかな春の日であるのに、どうして桜の花は落ち着いた心もなく散り急ぐのだろうという、散る花を惜しむ情。

問19 (⑨の歌・掛詞「いく野」)

「生野(地名)」と「行く(野を行く)」の二つの意味が掛けられている。

問20 (⑨の歌・掛詞「ふみ」)

「踏み(足で踏む)」と「文(手紙)」の二つの意味が掛けられている。

(歌意=大江山を越えて生野を通る道が遠いので、まだ天の橋立の地を踏んでもいないし、母からの手紙も見えていません。)

問21 (⑩の歌・序詞の働き)

「瀬をはやみ岩にせかるる滝川の」は、流れが岩でいったん分かれてもまた一つになる急流の様子を示し、「われても末にあはむ(今は分かれても、いつかきっと結ばれよう)」という思いを導いている。

問22 (⑩の歌・「われて」の二義)

「(水が岩で) 分かれて」と「(二人の仲が) 分かれて・別れて」の二つの意味が重ねられている。

問23 (体言止め)

⑨。結句が「天の橋立」という名詞で結ばれている。(⑨が最も明確な体言止めの例。)

問24 (枕詞と序詞の違い)

枕詞は、原則として五音から成り、特定の語を導く慣用的・固定的な表現で、作者の独創ではなく古くから決まった形で受け継がれる(多くは現代語訳しない)。一方、序詞は音数に決まりがなく二句以上に及ぶことが多く、作者がその歌のために独自に創作する前置きであり、内容として訳出されることが多い。固定的か独創的か、短いか長いかという点で両者は区別される。